

アドルフ・ロース パリ Haus Tristan Tzara
Haus Josephine Baker 1920 年代

はじめに

本研究ではウィーンの建築家アドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933) のパリ滞在期 (1924-1928) に焦点をあてる。ドレスデンで建築を学び、その後アメリカ、イギリスを経て (*1) 帰国したロースは、ウィーンにおいて新聞や雑誌に多くの論考を執筆しながら、建築作品を手がけた。またパリにおいても実際に 2 つの実作品と 11 の論考を残し、しばしば講演を行っていたことが知られている (*2)。一方で実際に彼の論考に目を通すと、フランス、特にそのパリといった語が散見され、それらに対してロースがたびたび言及していることが伺える。それにも関わらず、これまでなされたロースに関する研究において、彼のパリにおける活動については断片的な情報の紹介や分析に留まり、その全体像は未だに明らかになっていない。まず当時のウィーン、パリの社会的、文化的背景を把握する。次にロース自身のパリに対する認識を彼の言説を整理することで明らかにし、パリ移住と帰国の要因を浮かび上がらせることによりロース全活動におけるパリ時代の位置づけを明らかにする。更にそれらを踏まえ近代ヨーロッパにおける中央と周縁という構図の一端を理解するのが本論文の目的である。

1 章 背景からみるパリとウィーン

この章では第一次世界大戦前後のパリ、ウィーンの社会的、文化的背景を把握した。ウィーンの都市計画 (リングシュトラッセ建設計画) はパリの都市計画 (パリ改造) をモデルに行われた。また、19 世紀末において、パリのアール・ヌーヴォーを模範にウィーン分離派が活動しているなど、文化面でもパリに追随していた様子がうかがえる。さらに、一次戦後ヴェルサイユ体制 (*3) によりフランス中心の国際体制が出来上がり、更に 1920 年代のパリは世界中から芸術家が集まる文化の中心地になり、中心 (パリ) — 周縁 (ウィーン) の関係が強固になったことがうかがえる。

2 章 パリに対する意識と移住の要因 (1896-1924)

移住する前のロースのパリに対する言説の整理、また彼がパリに移住するきっかけとなる事項を整理することで、彼が何故パリに向かったのかを把握した。

■移住前のパリに対する意識

彼はウィーンの工芸家に向かって「私は来たるべきパリの万国博覧会を想定している」(「新様式とブロンズ産業」, 1898)、と述べていたり、「この 1 世紀半を通じて、われわれはもっぱらフランスから文化を受容し、フランスのリーダーシップに従うばかりだった。」(「配管工」, 1898) と述べている通り、移住前からパリ、フランスという土地を多に意識していたことが分かった。

■スイスでの人脈形成 (1917)

第一次世界大戦中、アドルフ・ロースは二週間、中立国のスイスに亡命する。ベルン、チューリッヒ、グラウビュンデンといった地方を訪れている。特にチューリッヒではダダイストの拠点であったキャバレー・ヴォルテール (Cabaret Voltaire) で後に自邸を設計することになるトリスタン・ツァラと出会っている。またその後夫となる詩人イヴァン・ゴルと共にここに出入りしていたクレア・ゴルは後にロースの論文「芸術と建築 (Art et Architecture)」を翻訳することになる。

■ウィーンにおける活動の限界 (1917-1924)

1920 年、市長から住宅問題を任された弁護士グスタフ・ショイの任命でロースは集合住宅建設局で働くことになる。ラインツやヒルシュシュテッテン、ホイベルクにて低層の集合住宅などを作り、一つの部局として昇格した集合住宅局のチーフ・アーキテクトとして活躍する。しかしながら戦後の復興期において量産の問題を解決するにあたり質の高い高層のテラスハウスを作るという彼のもくろみは、当時宮殿風の巨大な集合住宅が粗悪品の市営住宅しかないウィーンでは理解されなかったためにロースは退職を決意することになった。その後、1923 年、コートダジュールの「テラスのある 20 個の家」(*4) の計画案を作っている。

■フランスにおけるロースの認知 (1906-1923)

雑誌において彼の存在がフランスにて次第に認知された。まず、1906 年にパリでも発売されていたイギリスの雑誌『The Studio』の「近代の装飾芸術について」(*5) においてウィーン分離派などとともに紹介された。次に当時フランス語圏とドイツ語圏の前衛芸術の交流を掲げていたドイツの雑誌『Der Sturm』にて 1908 年「建築について」(*6) など 5 編 (*7) がドイツ語で発表され、一部の人々とはいえ国際的な広がりを持った層に認知された。1913 年には『Cahiers d'aujourd'hui』で彼の論文、「装飾と犯罪」、「建築について」がフランス語に翻訳されて出版される。この論文は 1921 年の『L'esprit nouveau』や 1923 年の『L'Architecture vivante』において再録されることになる。また 1920 年にはパリの前衛芸術雑誌『Action』にて「芸術と建築」が翻訳されている。更に『Cahiers d'aujourd'hui』の編集長であるジョルジュ・ベッソンが勤めていたジョルジュ・クレ社より 1921 年、彼の初の著作集『Ins Leere Gesprochen』がフランスで発売される。これらの雑誌、本による認知によりロースは 1923 年サロン・ドートンヌにてグラント・ホテル・バビロン案 (*8) やモイッシ邸案 (*9) などを展示することに成功したのであった。

3 章 パリにおける活動の全容 (1924-1928)

この章ではパリでの実作品、動向、言説の整理を行った。

■動向・論文

・『人でなしの女』(図1) (*10)

1924年、フランスに移住したアドルフ・ロースは、マルセル・レルビエ監督の映画『人でなしの女』の試写会に招かれる。彼は「ウィーンではこのような待遇を受けたことがない。」と述べている。その模様をウィーンの新新聞ノイエ・フライエ・プレッセで発表、同紙のパリ特派員はオーストリアのジャーナリズムにおいてもっとも切望された地位であった。また、彼の紹介文が掲載されたビラはパリの街中に張り出された。

・パリ万国装飾美術(アール・デコ)博覧会

1925年、ロースはアール・デコ博覧会の展示を目にする。オーストリア館では、かつて共に仕事を行ったフレデリック・キースラーや論敵ヨーゼフ・ホフマンが展示、レスプリ・ヌーヴォー館ではル・コルビュジエ、他にもフランスの建築家であり、ロースが論文「人でなしの女」で近代적であると絶賛したロベール・マレ・ステファンの設計作品があった。

・「近代的な感覚の人間」

1926年ソルボンヌで「近代的な感覚の人間」(*11)の講演をする。初めは450人のキャパシティであったが後の3回に渡る講演は900人の規模の大きな会場で行われた。

■作品

・トリスタン・ツアラ邸(1925)(図2)

当時パリの最先端のファッション雑誌であった『Vogue』1927.4の「新しい建築」(*12)という文章の中で「この計画は建築を知り尽くした者の明確なヴィジョンを示している」と紹介された。

・クニーシェ・パリ店改装(1927)

・ジョセフィン・ペーカー邸案(1928)(図3)

・ヘレナ・ルビンシュタイン邸案

当時、化粧品で名を馳せていた有名人のための計画案

・シャンゼリゼ通りのホテルのための計画案

・シャンゼリゼ通りのホテルのための計画案

これらの計画案からロースが高層建築に興味を持ち続けたことが分かった。

4章 パリからの帰国の要因とその後(1928-1931)

この章では、1928年9月、パリからの帰国後再び1930年にパリ、フランスを訪れるまでのロースの動向、その時期のパリに対する言説を把握した上で、彼が何故ウィーンに帰国したのかを考察した。

■動向・論文

・「ウィーン市庁のアパートは批評に値しない」(1930)(*13)



図1. ロースが論評した映画

『人でなしの女』のビラ

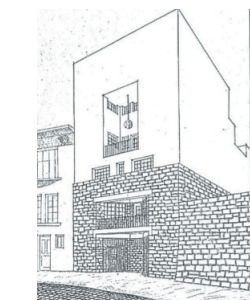


図2.『Vogue』に掲載されたトリスタン・

ツアラ邸、ロースによるスケッチ

ブルメル邸(*14)の計画のためチェコスロバキアに行った。しかし1928年12月、ロースは幼児猥褻罪で逮捕・告訴され、禁固4ヶ月の執行猶予付き実刑判決が言い渡された。それが原因で体調を崩しチェコスロヴァキアに留まっていたのだが、回復した後初めてパリを訪れた時の講演である。この講演の中で彼は「パリに限った話ではないが、私は一つの傾向を憂いている。オペラの建物のほうが最近の建築物より近代的だ、ということだ。マルゼルブ通りの銀行を除いては。少数派の建築家しか彼らが芸術家というより工芸家であるべきだ、ということが分かっている。」と述べている。また、「最近のヨーロッパの中央においては金属製の家具が流行している。中世のフランスでは善良なる王ダゴベルトがそのようなものから作られた玉座に座っていたことを考えると滑稽である。」と当時のフランスをよく思っていないことが分かった。一方、彼の故郷であるウィーンについては「私は最近の故郷には全く協力できない。ウィーンの人々は私の逆を行っている。彼らは私が新しく出来たウィーン市庁のアパートを批判したことを良く思っていない。あんなもの、お湯は通っていないし温熱機構もバスルームもないのに！私はあれには絶対に同意しない！」と述べ、強く決別の意志を表している。

・1931年フランスの旅

ロースはプラハにて、コートダジュールでの「テラスのある20個の家」計画の紹介記事を書いていたそう。その作品とグランド・ホテル・バビロンを実現させるべく1931年当時の妻であるクレア・ベックとフランスのリヴィエラからパリを旅行した。しかし神経病で話をするのもおぼつかない状態になってしまう。

・「松の木を救う計画」(1931)(*15)

先述の旅行時の南仏のリヴィエラに計画されているホテルに対する改良案。木を伐らないような設計にしている。フランスの雑誌『L'Architecture d'aujourd'hui』1931.10で発表。

■晩年の建築作品

・モラー邸

ロースがパリにいた1927年に既に計画が始まっていた。ウィーン帰国の一つの原因であった。

5章 ヨーロッパの中央と周縁におけるアドルフ・ロース

以上を元にロース全活動におけるパリ時代の位置づけを行った。それに基づき、ヨーロッパの中央と周縁という構図におけるアドルフ・ロースを把握した。

ロースは晩年までパリ、フランスの計画にこだわり続けた事が分かった。しかしながらなかなか施主に恵まれなかったために他の国での計画を行ったのであった。しかしながら結局の所、晩年は最期までフランスでの施主は得ることができなかった。それはパリの芸術運動の終わりを告げる1931年の大恐慌の影響もあったのであろう。

謝辞

加藤淳氏をはじめとする早稲田大学中谷研究室アドルフ・ロース翻訳出版ゼミの皆様にも厚く御礼申し上げます。

*1 1893-1896 *2 ソルボンヌにて。三章参照。 *3 第一次大戦後のフランス中心の秩序のこと。 *4 「Gruppe von awanzig villen mit dachgaten」 *5 「Modern Decorative Art」 *6 「Ueber Architektur」 *7 他には「Tristan in Wien」、「Der Sattlermeister」、「Vom armen reichen Mann (紳士のモード)」、「Vom Gehen, Stehen, Sitzen, Liegen, Schlafen, Essen, Trinken」 *8 「Grand hotel Babylon」イギリスの作家、アーノルド・ベネットの同小説から来ている。 *9 「Haus Moissi」 *10 「L'Inhumaine」 *11 「Die Einrichtung der modernen wohnung」 *12 「Le nouvelle Architecture」 *13 「Die wiener gemeindebauten vertragen keine kritik」 *14 「Haus Brummel」 *15 「Projet de sauvegarde d'une pinède」